



中村不折 ふせつ 1866年（慶応2）～1943年（昭和18） 洋画家・書家

江戸（東京）の生まれ 幼名は鉦太郎 別号に環山など 父は東湊町の書役だった

1870年（明治3） 4歳 明治維新の混乱を避け一家で父の郷里の長野県高遠に移住

1876年（明治9） 10歳 工部美術学校 フォンタネージ来日（明治11年9月、帰国）

1877年（明治10） 11歳 松本の商家の小僧になる 西南戦争

1880年（明治13） 14歳 楊守敬来日。

1882年（明治15） 16歳 病気になる高遠に帰り菓子屋職人になる 夜間勉学に励む

小山正太郎と岡倉天心の「書ハ美術ナラズ」論争

1883年（明治16） 17歳 漢学を北原安定に南画を真壁雲卿に 書を白鳥拙庵に学ぶ 工部美術学校廃校

1884年（明治17） 18歳 高遠小学校代用教員となる。教員をして上京のための資金をコツコツと貯めていた。

1885年（明治18） 19歳 伊那郡小学校に転勤 河野次郎の教えを受ける。

1886年（明治19） 20歳 図画と数学の教師として飯田小学校に転勤。河野次郎から洋画家になるよう勧められ、小山正太郎に紹介される。教員を辞職し、画家になるため上京を決意。

1887年（明治20） 21歳 上京し画塾「十一会」（後の「不同舎」）に入塾 小山正太郎に師事 洋画を学ぶ

1894年（明治27） 28歳 7月、日清戦争勃発 新聞「日本」の記者となる。新聞「小日本」の編集主任正岡子規と出会い挿絵を担当 ここに日本初の新聞挿画画家が誕生した。

「不折」の号を、はじめて使用。

1895年（明治28） 29歳 日清戦争の従軍画家として大陸へ 六朝の書に出合う 5月、日清戦争終結

1896年（明治29） 30歳 堀場イトと結婚 日本新聞社に入社 白馬会結成

1897年（明治30） 31歳 島崎藤村の『若菜集』の挿絵を担当。長女まさ生まれる。

1898年（明治31） 32歳 それまで住んでいた湯島を引き上げて、上根岸に住む。

1899年（明治32） 33歳 中根岸31番地にアトリエを新築し転居 藤村の『二葉舟』の挿絵担当。

3月、次女・とし生まれ、5月死去。夏頃、子規に水彩絵の具を贈る。

1900年（明治33） 34歳 2月、浅井忠渡仏。4月、パリ万博開会。7月、小山正太郎渡仏。9月、漱石渡英。

10月、三女・みね尾生まれる。義和団事件。

6月29日、渡仏。ラファエル・コランに師事。藤村の『落梅集』の挿絵担当。

アカデミー・ジュリアンで歴史画家ローランスに師事 正岡子規死去（享年34歳）

2月、日露戦争勃発 ロダンのアトリエ訪問 長女まさ死去（享年7歳）

3月、仏国から帰国、太平洋画会会員となる 漱石の『吾輩は猫である』の挿絵担当

日本新聞社を退社して朝日新聞社の社員となる。9月、日露戦争終結

1906年（明治39） 40歳 1月、長男丙午郎生れる。春、碧梧桐初来訪。六朝代の拓本に感動。漱石と疎遠に。

1907年（明治40） 41歳 1月、碧梧桐の訪問を受ける。6月「談書会」創立。東京博の審査員に 文展が創

設され審査委員になる。9月、次男・惣六生まれる。陸羯南没。12月、浅井忠没。

1908年（明治41） 42歳 前田黙鳳らと「健筆会」設立 7月、前田黙鳳、日下部鳴鶴らと「書談会」設立。

8月、群馬県の磯部温泉で静養中に龍眠帖を書く 10月、「龍眠帖」刊行。

書壇の組織者、指導者として活躍 明治43年4月、荻原礫山没（享年32歳） 父没

河東碧梧桐らと「龍眠会」結成 辛亥革命（1911年～12年）

「龍眠会」の機関誌『龍眠』発行 母没 伊藤左千夫没 三男・亥三郎死去

1913年（大正2） 47歳 第一次世界大戦勃発 2月、『六朝書道論』刊行

1914年（大正3） 48歳 根岸2丁目に転居

1915年（大正4） 49歳 1月、小山正太郎没 12月、夏目漱石没（49歳10か月）

1916年（大正5） 50歳 ロシア革命

1917年（大正6） 51歳 第一次世界大戦終結

1918年（大正7） 52歳 帝国美術院会員となる 『楷書千字文』『行書千字文』『草書千字文』刊行

1919年（大正8） 53歳 11月、『龍眠』59号で廃刊

1921年（大正10） 55歳 森鷗外没 不折が墓碑銘を書く 『森鷗外全集』刊行その題字揮毫 1月、鳴鶴没

1922年（大正11） 56歳 関東大震災 大正13年、『日本書道作振会』創立昭和3年「不折」を本名とする。

1923年（大正12） 57歳 書道博物館建設に着手 翌年完成

1932年（昭和7） 66歳 太平洋画会研究所が太平洋美術学校と改称され校長となる

1934年（昭和9） 68歳 文部大臣から財団法人の認可を受け書道博物館開館

1936年（昭和11） 70歳 帝国芸術院会員となる 2月1日碧梧桐死去。（65歳）

1937年（昭和12） 71歳 第二次世界大戦勃発

1939年（昭和14） 73歳 文化賞を贈られる

1942年（昭和17） 76歳 6月6日、イト夫人と散歩中、脳溢血で倒れ急死。

1943年（昭和18） 77歳 東京大空襲 書道博物館と一万点余の資料は焼失を免れた

1945年（昭和20） 3月 第二次世界大戦終結

中村不折の生い立ちと画家への道

世のさがも人の噂もきこえねば絵筆とるべく身のやすらかに（不折）

不折は、明治維新の2年前に、中村源蔵と母りゅうの長男として、江戸で生まれた。子規や漱石より1歳年上である。父源蔵は、江戸の京橋東湊町の書役を務めていた。書役とは町人身分の書記のことらしい。

明治維新で失業した源蔵は、不折が4歳のとき、一家で生まれ故郷の長野県伊那高遠町に帰った。しかし、家の生活は苦しく、職を求めて、伊那や松本に移り住んだ。小学校の教育も満足には受けていないという。小学校を終えた11歳の不折は、松本の商家の小僧になったり、下諏訪で呉服店に年季奉公に出たりした。

14歳の頃から不折は、商人になるのが嫌で、学問や芸術の道へ進みたいと考えようになったという。16歳のとき、病気になる、高遠に帰り、菓子職人となる。しかし、学問によって身を立ようと考え、朝早くから働き、仕事を早くすませ、時間を作って、夜、勉学に励んだ。不折は幼いころに耳の病に罹り、聴覚を失っていく。絵の道に進もうと思ったのも、聾ということが理由の一つであったと想われる。

漢学を北原安定に、南画を真壁雲卿に、

書を巻菱湖門の中沢雪城の門弟の、白鳥拙庵に学んだ。

18歳頃から20歳、高遠小学校代用教員、伊那郡小学校、

飯田小学校などで図画と数学を教えた。

彼は、いつか上京して、画家か数学者になりたかったらしい。

そのための資金を、教師をしながらコツコツと貯めていた。

明治18年夏、長野師範学校の図画教師であった河野次郎の教えを受けた。

河野次郎は、高橋由一から洋画の手ほどきを受けた洋画家のパイオニアで、

大正時代を代表する洋画家・河野通勢の父である。河野次郎は不折に、

洋画家になることをすすめ、先輩の小山正太郎に紹介し、上京させた。

不折は明治20年、教師を辞め、画家になるため上京、高橋是清邸に下宿

貧しい青年は、三畳一間で自炊生活を始め、十一会（不同舎）に入塾し、

小山正太郎に師事、本格的に洋画を学ぶことになった。

明治9年、日本最初の国立美術教育機関である「工部美術学校」が発足。

小山正太郎は開校と同時に入学し、フォンタネージに師事、のち助手となる。

しかし、フォンタネージは、明治11年（1878）失意のうちに日本を去る。

小山は、後任のフェレットイーの教え方に不満な、浅井忠や松岡寿ら、

同志と共に退学し「十一会」を結成した。これは洋画家初の団体であった。

明治15年、小山と岡倉天心との、「書ハ美術ナラズ論争」がおこった。

国粹主義の台頭等により明治16年、工部美術学校は廃校になった。

その後「十一会」は、明治20年、小山の私塾「不同舎」へと発展する。

門下生には、中村不折、青木繁、坂本繁二郎、下村為山、満谷国四郎、

小杉未醒（放菴）、荻原守衛（碌山）らがいた。講師は小山、本田錦吉郎、

浅井忠らであった。明治22年、東京美術学校が開校したが、西洋美術を排斥。

工部美術学校出身の、西洋美術作家たちを中心に「明治美術会」が発足した。

明治26年、パリ留学から帰国した外光派（紫派）の黒田清輝が入会し活気づくが、

明治29年、黒田は会を脱退し「白馬会」を結成、東京美術学校に黒田を中心として、

西洋画科が置かれた。明治美術会系の画家達は旧派（脂派）と呼ばれ、

次第に勢力がなくなり、明治35年1月、明治美術会は解散した。



浅井忠「農家」1894年頃 水彩



小山正太郎「牧童」1879年 水彩



フォンタネージ「静寂」1861年 油彩



河野次郎「橋にたたずむ人物」油彩



高橋由一「鮭図」油彩 日本最初の「洋画家」

明治美術会の解散後、明治美術会の満谷国四郎らは、

「太平洋画会」を結成し、同年春、第一回展を開催した

明治37年（1904）、太平洋画会研究所を開設。

明治38年春、帰国した不折は、太平洋画会の教授となった。

太平洋画会研究所は、昭和4年（1929）、

「太平洋美術学校」と改称。中村不折が初代校長となる。

明治20年（1887）、上京してからの不折は、

風景画を中心に絵画の勉強に打ち込んだ。

明治24年には、下村為山と共著で、

『水彩画絵手本』を発売し、

油絵をはじめた。

そのころ、不折は貧困と苦学のせいか、

耳がほとんど聞こえなくなっていた。

正岡子規との出会い

明治25年、子規は、陸羯南が創立した日本新聞の社員になった。

その後まもなく、新聞「小日本」の主筆となった子規は、

新聞に挿絵を載せることを思いつき挿絵画家を探していたところ、

近所に住む浅井忠から中村不折を紹介された。運命的出会い！

明治27年（1894）3月、不折は子規と出会い、新聞「日本」の

記者となった。ここに日本初の新聞挿絵画家が誕生した。

「不折と子規は、精神的・一卵性双生児なのではないかと思った。」

（馬淵礼子氏）

明治27年（1894）8月1日、日清戦争勃発。「・・・小日本」の紙上へ、毎日戦争に関する挿絵を描くこ

とになってから、正岡君は、「やっぱり実戦を見て描かなければほんとうの戦争気分を写すことは出来ない」と沁

み沁み感慨を漏らした。それを聞くと、僕は直ぐに尤もだと思ひ、戦争の渦中に飛び込んで危険を冒して見たい

と云ふ気もあった・・・」（不折『僕の歩いた道』より）

不折は、明治28年（1895）子規に誘われて、日清戦争の従軍画家として、4月13日広島の出港（子

規は数日前に出港）遼東半島の大連湾に同16日到着した。しかし、3月半ばから下関で日清の休戦交渉がはじま

り、4月17日、下関で日清講和条約が調印され、5月8日、清国の芝罘（煙台市）で批准書が交換され、条約が

発効し、日清戦争は終わった。子規は、明治28年4月7日付けの五百木瓢亭に宛てた手紙で、「いくさ見ずに帰

るは、誠に本意なく候」と語っていた。

不折は、先に帰国する子規を見送り、旅順を立ち、

金州、營口、鳳凰城などを見て、朝鮮に入り、仁川を経て、

8月初旬宇品に着いた。須磨に病床の子規を見舞った後、

奈良、京都の古社寺を見物して8月下旬帰京した。約4カ月間、

満州、朝鮮を旅し、休戦直後の様子をスケッチした不折は、

この旅行がきっかけで、書の魅力にひかれてゆき、

漢字の資料の収集に打ち込み、

後年、書道博物館を開設することになる。

彼は、満州で『龍門二十品』の拓本などに出会い、それらを手入し、

既成の書の美の価値に対して根本的な疑問を持つようになったと想われる。



不折「中国風景（財神廟）」1895年 水彩



不折「自画像」明治24年



不折「憐れむべし自宅の写生」
明治26年 台東区立書道博物館蔵



黒田清輝「朝妝」
1893年（明治26）



新聞「日本」明治35年9月21日号

・・・戦争と云ふもの、研究には全然失敗した。併し御蔭で支那や朝鮮の趣味を味ふことが出来た。自分が支那や朝鮮の趣味を解し始めたのは、全く此事件の賜物であると思ふ。是は自分の履歴には、余程重大な関係がある。」（「談話筆記」明治42より）

中国から帰国した不折は、明治29年、堀場イトと結婚。日本新聞社に入社し、再び挿絵等を担当した。明治31年、根岸に住み、明治32年、第十回明治美術展覧会に「紅葉村」を出品。この作品は翌年パリ万博に出品され、マンシオン・オノラーブル賞をうけた。同年、中根岸31番地にアトリエを新築し移り住んだ。不折は、雑誌ホトトギスや島崎藤村の詩集の装丁、挿絵など広く手がけ、画家として活躍した。

(子規の明治32年の俳句と短歌)

折れ曲り折レマガリタル路地ノ奥ニ折レズトイヘル画師ハ住ミケリ

樽柿を握るところを写生哉

紙ににじむ秋海棠の絵の具哉

不折子の画室成る 苦辛ここに成功を見る冬の梅

画室成る燕を贈つて祝ひけり



不折「若菜集」挿絵
明治30年(1897年)



不折装丁「若菜集」
明治30年(1897年)



不折装丁「藤村・一葉舟」
明治31年(1898年)



不折装丁「藤村・落梅集」
明治34年(1901年)

明治22年(1889)に創刊された新聞「日本」の創刊の目的の一つは、「国民精神の回復発揚」であった。

それは、西欧かぶれの思潮を克服するための第一歩であった。そのころ、子規も伝統詩の再生に取り組み始めていた。子規は、陸羯南の隣に住んで、日本新聞の社員になり、母と妹を東京に呼び、大学を中退した。

油絵の彩色多き暑さ哉(子規・明治26年)・・・「南画に非ずんば絵に非ず」という絵画観。

右の句のように洋画を嫌った子規だったが、不折に出会って、「洋画に非ずんば絵に非ず」とまで変化した。

西洋の芸術論の影響を受け、子規は、「写生」「写実」を基本とする詩歌散文革新運動へと命を削って行った。

不折は「写生」によって古人の見いだせなかったものを「発見」出来るかもしれない、と語っている。(俳画法)

明治27年8月、新聞「日本」紙上に掲載された、「不忍十景」と「不忍十景に題す」で、不折と子規は画俳交流を始めた。その第1回で不折は「写生は真景を写すの意」「写生技術と画境発見とは両者相俟て始めて完全なる絵画を為す。」と画論を述べている。

「油画が這入って来て、いよいよ写生が完全に出来るようになった。此写生は無論感情的写生であつて、

人がものを見て感ずる度合に従つて書く・・・」

(子規「写生写実」)

春蘭や無名の筆の俗ならず(子規・明治33年)

朝顔や絵ノ具ニジンデ絵ヲ成サズ(子規・明治34年)

草花を画く日課や秋に入る(子規・明治35年)

朝顔や我に写生の心あり(子規・明治35年9月)

「神様が草花を染める時も矢張こんなに工夫して楽しんで居るのであらうか。」「草花の一本を枕元に置いて、それを正直に写生して居ると、造化の秘密が段々分つて来るやうな気がする。」(明治35年・子規「病牀六尺」)

「花はわが世界、草はわが命」(子規) 不折は、寝たきりの子規のために絵具や画帳を用意した。

「・・・(明治27年)秋の終りから冬の初めにかけて毎日の様に根岸の郊外を散歩した。其時は何時でも一冊の手帳と一本の鉛筆とを携へて、得るに随て俳句を書きつけた。写生の妙味は、此時に始めてわかつたような心持がして、毎日得る所の十句、二十句な獲物は、平凡な句が多いけれども、何となく厭味がなくて垢抜がした様に思ふて自分ながら嬉しかった。」(子規・明治35年『癡祭書屋俳句帖抄上巻』序文より)



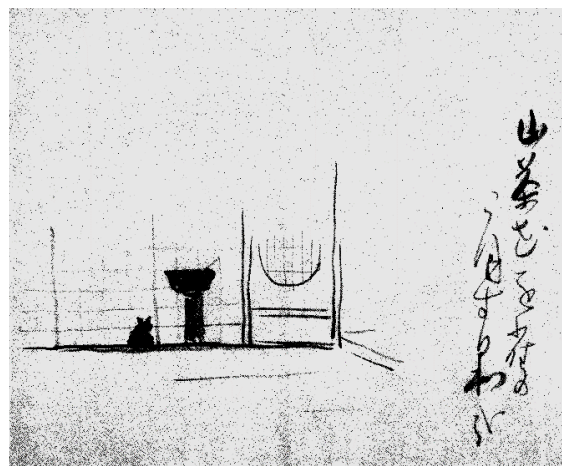
子規筆「朝顔」『仰臥漫録』より 明治34年



不折画「妻君の行水」子規「病牀手記」明治30年夏以降



不折画「銀杏谷八景」子規「叙事文」明治33年？



子規・自画賛（松井貴子氏推定）「山茶花猫」明治28年冬

俳句は「山茶花を雀のこぼす日和哉」
画は、縁側の猫と手水のシルエット。
画によつて空間を設定し、画では表現し難い物の動きや時間を句で表現し、句画が補い合つて、描かれた世界が、より広く深くなる。画に描かれていないものを俳句に詠むという探求。

画俳交流（松井貴子氏の研究より）
2006年9月、子規庵で120点余の句画資料が初公開された。これらは明治25年から明治34年頃までのものである。この期間は、子規が日本文学の近代化革新を成し遂げ、写生論を構築した時期にあたる。
子規は不折から西洋の美術理論を教わつただけでなく、不折との画俳交流を通して、子規の俳句観・絵画観は、大きく変わつていった。さらに子規は、俳句だけでなく短歌、小説へと文学革新を展開していった。

子規は、連作句で、時間の経過、ものの動き、音声、視点の遠近の変化を詠むことを意識している。この様々な点景を詠んだ連作は、不折の「重ね絵」の影響である。（松井貴子氏）

「妻君の行水」
盟の中で手ぬぐいを使って行水する女性の背中、目隠し、一本の木が描かれている。不折は、明治30年8月2日から書かれた子規の「病牀手記」の連作句を見てから、この絵を描いたらしい。子規は行水にまつわる様々な句を読んでいる。

垣まはらに行水すべく隅もなし
行水や沛然としてタ立す
行水や背中によぐ櫓の影
朝顔の垣のあなたに行水す
蝉鳴くや行水時の豆腐売り
行水に夫呼ぶ背戸の鼠哉
気持よや行水過ぎて雨を見る
宵月や黍の葉隠れ行水す
行水や盥に遊ぶ児二人
行水を出て梳る縁の端
行水の肌白うして痣を見る

「銀杏谷八景」
一つの画面に複数の絵が描かれている。不折はこのような手法でよく絵を描いていた。松井貴子氏は「重ね絵」と呼んでいるが、映画や洋画の「モンタージュ」の技法と言つていいだろう。不折は、多くの事を同時に描きたいのかも知れないが、時間を表現しようとしていると思われる。

傘はりの貧しく暮らす野菊哉
冬枯れて萩の実赤き律哉
上野の晩鐘 筑波の暮雪 ほこり

「不忍十景 其1」
石橋の下に咲きけり蓮の花（子規）
「下」という表現を用いて、石橋と蓮の花の位置関係を明らかにし、画論に基づく結構布置、取捨選択、主意の表現を意識した句作となつている・・・。（松井貴子氏）



不折画「不忍十景 其1」（「日本」明治27年8月14日）

子規は、明治31年2月下旬から3月はじめにかけ10回にわたって、「歌よみに与ふる書」を「日本」紙上に発表。（和歌の革新運動開始）

足たたば 不尽の高嶺のいただきをいかづちなして踏み鳴らさましを
足たたば 二荒のおくの海水にひとり隠れて月を見ましを
足たたば 北インヂアのヒマラヤのエヴェレストなる雪くはましを
足たたば 蝦夷の栗原くぬぎ原アイノが友と熊殺さましを
足たたば 新高山の山もとにいほり結びてバナナ植多ましを
足たたば 大和山城うちめぐり須磨の浦わに昼寝せましを
足たたば 黄河の水をかし渉り華山の蓮の花剪らましを

世の人は四国猿とぞ笑ふなる四国の猿の子孫ぞわれは
ひんがしの京の丑寅杉茂る上野の陰に昼寝すわれは
いにしへの故里人の多がきに墨絵の竹に向ひ座すわれは
人皆の箱根伊香保と遊ぶ日を庵に籠もりて蠅殺すわれは
富士を踏みて帰りし人の物語聞きつつ細き足さするわれは
吉原の太鼓聞えて更くる夜にひとり俳句を分類すわれは
昔せし童遊びをなつかしみこより花火に余念なしわれは
果物の核を小庭に撒き置きて花咲き実る年を待つわれは

西洋美術理論の「写生」という概念、(バルビゾン派の

絵画的西欧リアリズム)が、フォンタネージから工部美術学校生の
小山正太郎と浅井忠に伝わり、小山や浅井の弟子であった中村不折
を経て、正岡子規へと継承され、子規によって文学理論としての写生論

が作られ、近代日本文学に重大な影響を与えた。子規没後は高浜虚子や斎藤茂吉ら
によって写生論は継承されていった。子規が絵画の写生論を、受容できたのは、

不折に出会う前に、同郷の洋画家下村為山の影響や、俳句分類や「膨大な「俳句分類」
を通じ『芭蕉七部集』に目を開かれて得られた(明治25年秋〜27年秋冬)所産」

(馬淵礼子氏) H・スペンサーの「文体論」から取捨選択の原理などを学んでいたこと

や、俳句や短歌など日本文学の近代化革新を企図していたことがあったからだと思われる。

写生論の中核は、

一、写生の材料は身近に無限に見出されること。二、対象の形、色、明暗、遠近を正確に再現すること。三、描
く対象を取捨選択すること。四、選んだ対象を構成して作品に仕立てること。五、中心となる対象に焦点を当て
て「主意」を表現すること。この「主意」を表現することが、作品制作の究極点である。

「・・・発見をしたならば古人の知らなかった古人以上の面白いことが出来るだろうと思ふ。色々の人の著書を
読んで頭に蓄えて置いてそれから実地に臨んで写生をする・・・読んでは写生をし写生をしては読み古人と競争す
る様なものだ、一草一木も化して貴重なものにして仕舞ふことが出来る。」(明治42年6月、不折著『俳画法』
不折は「写生」によって古人の見いだせなかったものを「発見」することが出来ると考えていた。

「・・・第一番に写生をするのだ、此写生と云ふ事がよく出来れば天地万物片端から取りて自家薬籠中のものと
なし恰も泉の涌き出す如くともつてもとりつくことの出来ぬ程面白いものを画いて見せる様になる写生
の効力の著しいのは前に述ぶる通りである・・・」(『俳画法』)

「・・・我々が書を習ふ唯一の目的は品位と云ふことにあるのだ、此品位を保たせんがために色々働いて居るの
だ・・・一点一画品位如何と心掛て行が俳画の最終の希望であるのだ」(『俳画法』)

「俳句をものにするには空想に倚ると写真に倚るとの二種あり。」(子規・明治28年『俳諧大要』)

「貫之は下手な歌よみにて『古今集』は
くだらぬ集にて有之候」古今集の歌よみ
などは、小手先の技を弄するばかりで、
すこしも颯爽としたところがない」
「慣用的な用語にとらわれず、漢語でも
欧米語でも、何でも取り入れるのが良い。
伝統にとられない態度が重要なのだ。」

(子規)

子規は、すでに俳句で実践していた連
作を和歌にも応用し、独特のハーモニー
のある世界を作り出していった。

連作「足たたば」

坂井久良伎(くらき)が送って来た箱
根の写真を見たことにより作られた。子
規は、足たたば、という、かなわぬ願
いを、くり返し歌うことで、切なさを強調
するという、独特の効果を生み出した。

連作「われは」

じたばたせず、現実を受け入れて、元
気に生きている自分の気持ちを詠ったも
の。風流や優雅ではなく、優しさや、や
るせなさなど、日常的で人間的な感情を、
普通の言葉で歌っている。このような歌
は、子規以前の和歌にはなかったらしい。



不折「海内無双美男子不折山人自惚之像」

不折と子規の画俳交流によって、子規の写生論を代表する『**叙事文**』（明治33年）が書かれた。

『**叙事文**』は、新聞「日本」の付録「日本付録週報」の明治33 1月29日、2月5日、3月12日版に掲載された。これは、子規の文章論であるが、写生論でもある。『**叙事文**』は「**写生文**」ともいう。

「・・・言葉を飾るべからず、誇張を加ふべからず、只ありのまゝに其事物を模写するを可とす。・・・実際の有のまゝを写すを仮に写真といふ。又写生ともいふ。写生は画家の語を借りたるなり。・・・短き時間を一秒一分の小部分に切つて細く写し、秒々分々に変化する有様を連続せしむるが利なるべし。・・・有のまゝに写すには相違なけれども固より多少の取捨選択を要す。・・・文体は言文一致か又はそれに近き文体が写真に適し居るなり。」

子規『墨汁一滴』明治34年4月28日、「藤の花」連作。美の極致。

夕餉したためりて仰向に寝ながら左の方を見れば机の上に藤を活けたるとよく水をあげて花は今を盛りの有様なり。

艶にもうつくしきかなとひとりごちつつそぞろに物語の昔などしぬばるるにつけてあやしくも歌心なん催されける。この道には日頃うとくなりまさりたればおぼつかなくも筆を取りて

瓶にさす藤の花ぶさ短かければたたみの上にとどかざりけり

瓶にさす藤の花ぶさ一ふさはかさねし書の上にたれたり

藤なみの花をし見れば奈良のみかど京のみかどの昔こひしも

藤なみの花をし見れば紫の絵の具取り出で写さんと思ふ

藤なみの花の紫絵にかかばこき紫にかくべかりけり

瓶にさす藤の花ぶさ花垂れて病の床に春暮れんとす

去年の春亀戸に藤を見しことを今藤を見て思ひいでつも

くれなゐの牡丹の花にさきだちて藤の紫咲きいでにけり

この藤は早く咲きたり亀井戸の藤咲かまくは十日まり後

八入折の酒にひたせばしをれたる藤なみの花よみがへり咲く

おだやかならぬふしもありがちながら病のひまの筆のすさみは日頃稀なる心やりなりけり。をかき春の一夜や。

同じく同年4月30日に載せた、「山吹の花」の連作。美の極致。

病室のガラス障子より見ゆる処に裏口の木戸あり。木戸の傍、竹垣の内に一むらの山吹あり。この山吹もとは隣なる女の童の四、五年前に一寸ばかりの苗を持ち来て戯れに植ゑ置きしものなるが今ははや縄もてつがぬるほどになりぬ。今年も咲き咲きて既になかば散りたるけしきをながめてうたた歌心起りければ原稿紙を手を持ちて

裏口の木戸のかたへの竹垣にたばねられたる山吹の花

小縄もてたばねあげられ諸枝の垂れがてにする山吹の花

水汲みに往來の袖の打ち触れて散り始めたる山吹の花

まをとめの猶わらはにて植ゑしよりいく年へたる山吹の花

歌の会開かんと思ふ日も過ぎて散りがたになる山吹の花

我が庵をめぐらず垣根隈もおちず咲かせ見まくの山吹の花

あき人も文くぱり人に往きちがふ裏戸のわきの山吹の花

春の日の雨しき降ればガラス戸の曇りて見えぬ山吹の花

ガラス戸の曇り払へばあきらかに寝ながら見ゆる山吹の花

春雨のけならべ降れば葉がくれに黄色乏しき山吹の花

粗笨鹵莽、出たらめ、むちやくちや、いかなる評も謹んで受けん。

われはただ歌のやすやすと口に乗りくるがうれしくて。

文学と美術の類似性は、
「描くべき材料を現実の世界から取り出すことができ、それらを再構成した作品によつて享受者に感動を与えることができること。絵画の特質が空間的であるのに対して、散文の特質は時間的である。」

（子規）

「きたなくして却つて美を成す者を『雅』といひ、きれいにして却つて不美を成す者を『俗』といふ」「主として配合の如何によつて雅なる者も俗となり、きれいなる者もきたなき者となる、同じ物を活かして使ふと殺して使ふとは俳人の技量次第也」（子規「俳諧反故籠」明治38年）

子規の言う「配合」とは調和という意。

「新しき語を用ゐず新しき材料を使わざるも、其配合の妙は読者をして趣味の清新を感じしむること深し。」（子規「明治二十九年の俳句界」明治38年）

「子規は、文学の中で一番、絵画的『写生』に適したものは、俳句で、文章はそれの時間的に連続したもの、短歌には『写生』でくくる事の出来ない主観的部分が十中一、二はあるように考えていた。」

（馬淵礼子「浅井忠白書」）

漱石・虚子・伊藤左千夫・長塚節らを、「写生文派」という。漱石の『吾輩は猫である』は、はじめ「山会」で発表された写生文であった。

明治40年代からは、写生文は高等教育における作文指導に取り入れられ、次第に小学校の作文教育に広まった。

口語体の写生文は、読者に書き手の体験をそのまま追体験させるといふ、これまでの日本語の文章ではできなかったことを可能にした、と言われる。

「子規は、晩年、写生文、短歌に於て、見たままを越え始めているが、絵に於ても写生の本質、ものの本質の中にこもる美の形象化に成功しつつあったと考えられる。」（馬淵礼子氏「浅井忠白書」）

子規は、不折の洋行を前に、不折との出会いや、その人品について、愛情あふれる思いを、『墨汁一滴』の6月25日から29日に書いている。(※『墨汁一滴』は新聞「日本」に明治34年1月16日から7月2日まで連載された随筆。4日休んで、計164回連載された。)

以下、『墨汁一滴』より、不折の人物や風貌を彷彿とさせる随筆である。

「中村不折君は来る二十九日を以て出発し西航の途に上らんとす。

余は横浜の埠頭場迄見送ってハンカチを振って別を惜しむ事も出来ず、はた一人前五十銭位の西洋料理を食ひながら、

送別の意を表する訳にもゆかず、己むを得ず紙上に悪口を並べて、

聊か其行を壮にする事とせり。

余の始めて不折君と相見しは明治二十七年三月頃の事にして、

その場所は神田淡路町小日本新聞社の楼上にてありき。

初め余の新聞『小日本』に従事するや適當なる画家を得る事において最も困難を感じり。当時の美術学校の生徒の如きは余らの要求を充たす能はず、・・・この時に際して不折君を紹介せられしは浅井氏なり。始めて君を見

し時の事を今より考ふれば殆ど夢の如き感ありて、後來余の意見も趣味も君の教示によりて幾多の変遷を来し、君の生涯もまたこの時以後、前日と異なる逕路を取りしを思へばこの会合は無趣味なるが如くにしてその実前後の大關鍵たりしなり。・・・而してその人を見れば目づらにして顔おそろしく服装は普通の書生の著たるより

も遙かにきたなき者を著たり、この顔この衣にしてこの筆力ある所を思へばこの人は尋常の画家にあらずとまでは即座に判断し、その画はもらひ受けて新聞に載する事とせり。

これ君の画が新聞にあらはれたる始なり。・・・」(6月25日)

「されどなほ余は不折君に対して満たざる所あり、

そは不折君が西洋画家なる事なり。

當時余は頑固なる日本画崇拜者の一人にして、

まさかに不折君がかかる新聞の挿画をまでも、

排斥するほどにはあらざりしも、

油画につきては絶対に反対しその没趣味なるを主張してやまざりき。

故に不折君に逢ふごとにその画談を聴きながら時に弁難攻撃をこころみ

そのたびごとに発明する事少からず。遂には君の説く所を以て今まで自分の専攻したる俳句の上に比較してその

一致を見るに及んでいよいよ悟る所多く、半年を経過したる後はやや画を観るの眼を具へたりと自ら思ふほどに

なりぬ。この時は最早日本画崇拜にもあらず油画排斥にもあらず、画は此の如き者画家は此の如き者と大方に知

りて見れば今までただ漠然と善しといひ悪しといひし我判断は十中八、九までその誤れるを発見し、併せて今ま

で画家に対する待遇の無礼なりしを悔ゆるに至れり。・・・」(6月26日)

「余が知るより前の不折君は不忍池畔に一間の部屋を借り、

そこに自炊しながら勉強したりといふ。

その間の困窮はたとふるにもなく一粒の米、

一銭の貯だになくて食はず飲まずに一日を送りしことも一、

二度はありきとぞ。・・・『小日本』と関係深くなりて後君は、

淡路町に下宿せしかば余は社よりの帰りがけに君の下宿を訪ひ画談を聞くを樂とせり。君いふ、今は食ふ事に

困らぬ身となりしかば十分に勉強すべしと。乃ち毎日草鞋弁当にて綾瀬あたりへ油画の写生に出かけ、夜間は新聞の挿画など書く時間となり居たり。・・・画く者は論ぜず、論ずる者は画かず。君の如く画家にしてかつ論

客なるは世に少し。・・・質問いまだ終らざるに早く既に不折君の滔々として弁じ初むるを見ん、もし傍

より妨げざる限りは君の答弁は一時間も二時間も続くべく、しかもその言ふ所条理井然として乱れず、実例ある者は実例(絵画の類)につきて一々に指示す。



不折画「鶏頭 子規居士之写生」
明治42年(1909)1月15日



不折筆「子規像」鉛筆素描



明治24年の不折
不同舎時代

通例画家が言ふ所の漠然として要領を得ざるの比に非ず。

余が君のために教へられて何となく悟りたるやうに思ふも、
畢竟君の教へやうのうまきに因る。」（6月27日）

「各自専門の学芸技術に熱心なる人は少くもあらねど、

不折君の画におけるほど熱心なるは少かるべし。

いつ逢ふてもいつまで語つてもいやしくも人に逢ひてこれと語らば、
終始面談をなして倦まず、筆あらば直に筆を取つて戯面を画き、

あるいは説明のために種々の画をかく。時を嫌はず処を択ばず宴会の席にても衆人の中にも人は酒を飲み妓をひやかしつつある際にも不折君は独り画を画き画を談ず。……君は自分のためにも勉強し人に頼まれても勉強す。……不折君は人に頼まれたるほどの事、
尽くこれに応ずるのみならず、その期日さへ誤る事少ければ書肆な

どは甚だ君を重宝がり……教科書の挿画、その他書籍雑誌の挿画及び表紙を依頼する者絶えず。……そのほか君の前に書画帖を置いて画を乞ふ者あれば君は直に筆を揮ふて咄嗟画を成す。……」（6月28日）

「……不折君は丈低く面鬼の如く髯ぼうぼうとして全体に強き方なり。

……不折君は粗衣粗食の極端にも耐へなるべく質素を旨として、

少しにても臨時の収入あればこれを貯蓄し置くなり。

君が赤貧洗ふが如き中より身を起して独力を以て住屋と画室とを建築し、
それより後二年ならずして洋行を思ひ立ち、

しかも他人の力を借らざるに至ては君が勤儉の結果に驚かざるを得ず。

……不折君は議論は勿論、普通の談話も声高く明瞭なり。……不折君は理窟の人なり。……不折君は勉強

家の随一なり。……不折君は酒も飲まず煙草も飲まず。……不折君はいきなりに筆を下して縦横に画きまは

す。……不折君は寸大の紙にもなほ山水村落の情景を描く癖あり。……不折君は一旦画き初めし者はどう
でもかうでも仕上げてしまふ。……不折君は初より終まで孜々として怠らずに画く。……君は耳遠きがた

めに人の話を誤解する事多し。……（少しほめたるを大にほめたるが如く思ふ誤即ち程度の誤最も普通なり）……
西洋へ往きて勉強せずとも見物して来れば沢山なり。その上に御馳走を食ふて肥えて戻ればそれ上こす土産は
なかるべし。余り饕餮と勉強して上手になり過ぎ給ふな。」（6月29日）

明治34年（1901年）6月29日正午、不折は、洋画を学ぶため、

横浜を出港、フランスへ旅立つた。これが子規との今生の別れになった。

不折は、8月某日マルセイユに入港、8月19日、パリに着く。

直ちに浅井忠の宿所へ行き、今後の事を相談した。翌日、

オテル・スフロに下宿。和田英作の紹介でラファエル・コランに師事。

以後、午前中はアカデミー・コラロッシでコランの指導のもと、

木炭デッサンを学び、午後はルーブル等の美術館に通い、

夜は、留学時代を通じ、日本から持参した『龍門二十品』

『書譜』等の臨書、と狩野派の粉本による日本画の修業を続けた。

明治35年1月、アカデミー・ジュリアンに転じ、

ジャン・ポール・ローランに師事。人物画を学ぶ。

アカデミー・ジュリアンでの授業と平行して、

ルーブルでコローなどの作品の模写に励み、

国立美術学校の聴講生となり、解剖学を学んだ。

明治35年8月19日、浅井忠は帰国し、京都に移住、

京都高等工芸学校教授に認められる。



不折筆「裸体習作」明治35年
ローラン時代 紙に木炭

不折は、パリで、人体素描の訓練に励み、日本美術界に、表現の基礎である裸体画を導入した。不折はパリでの4年間、一度もカフェに行かなかったらしい。



明治35～38年（1902～05）アカデミー・ジュリアンで
中央左向きの椅子に座っている人物が不折



明治34年の不折
渡仏前に夫人と記念写真



明治34年 渡仏前に家族と

フランスから「尋常一年生に返ったつもりで第一歩からの修行を始めました」と、不折と入れ違いで帰国した浅井忠への手紙に不折は書いている。浅井忠がそのことを子規に伝えると、子規は涙をらはらとこぼして喜んだという。浅井忠がこの様子を不折に伝えたところ、不折は「子規の何時までも自分を思ってくれる真情に感謝した」と語ったという。「私と正岡とは最も深い関係にあって、私にとって正岡ほど、印象の深い人物は少い」と、後年不折は述べている。

明治36年10月9日、不同舎の後輩、萩原礫山と会い、下宿に招き、懇談する。

礫山は、不折の勧めで彫刻家を目指す。明治37年（1904）日露戦争がはじまり、お金も欠乏し、今後の研究継続は不可能と思い、不折は帰国を決断した。

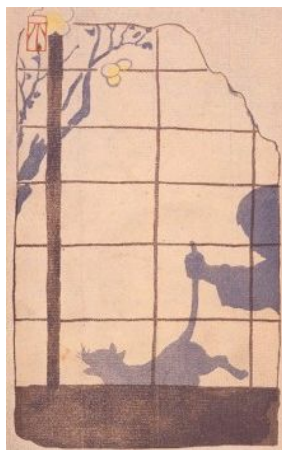


浅井 忠 肖像

明治38年（1905）1月22日、マルセイユを立ち、3月1日、神戸着、4日帰京。4年弱の留学であった。「・・・絵に限らず、筆を持つことは何でも好きだったので、暇があれば字を習ってみた。けれども、西洋へ行くまでは暇がなくて、本職の方の時間も得られない位、いそがしい日を送ってゐたので、他の事をやる時間などは全くなかった。そこで、西洋へ行く二三年前から、人が煙草を吸う時間を、僕は字を習った。・・・日本画の方は、小さい時分に南画を習ひ、本職の西洋画をやる傍ら、それに対する趣味も変わらなく続いた。・・・字を習ふやうな具合にして、南画も習った。」（不折『僕の歩いた道』より）

「西洋画の研究が進むにつれて、僕の洋行熱は次第に深刻になって来たが、先立つものは資金であるので、中々実現出来なかった。中には金を調達して呉れるといふ人もあったが、今まで兎に角、独立でやって来たのだから、人の力を借りるのは厭だと思ひ、なるべく自分の力で洋行の資金を作ろうと思った。僕の瘦我慢はいつになっても癒らない。・・・」（不折『僕の歩いた道』より）

帰国した不折は、太平洋画会研究所の教授、文展の審査員になるなど、画家として活躍した。また、画家としてだけでなく、書壇の組織者、指導者としても活躍する。漱石の「吾輩は猫である」上編の挿絵なども描いた。



不折の挿絵
「吾輩は猫である」
明治38年（1905年）



不折の挿絵
「吾輩は猫である」
三味線をひく猫

明治38年晩秋、忙しすぎて神経衰弱になる。

この頃日本新聞をやめ、朝日新聞社の社員になっている。

明治39年の春、河東碧梧桐が訪ねてきた。

彼に、六朝の造像銘の拓本を見せ、大きな感動を与えた。

この年の11月ころより、漱石と疎遠になったようである。

「・・・不折は無闇に法螺を吹くから近來絵をたのむのがいやになりました。」（夏目漱石・橋口清宛て書簡）

明治40年1月、青森の浅虫温泉で碧梧桐と会い、彼に、「爨宝子碑」「中岳靈廟碑」の拓本を見せる。それは、碧梧桐に強烈な印象を残した。

同年3月、中原悌二郎・中村彝らが弟子になる。

6月、日下部鳴鶴を中心に「談書会」が創立され、

不折は、その発起人・幹事となった。

秋頃、過労から体調をくずし、翌年まで静養。

9月2日、陸羯南が逝去。（享年51歳）

12月16日、浅井忠が京都で逝去した。（享年52歳）



不折「建國勲業」明治40年 油画 150号 大正12年関東大震災で焼失
東京勲業博覧会に出品 1等首席になる。裸体が不敬であると騒がれた。
不折は、主に歴史画によって、今を生きる日本人固有の表現を探究した。

書の活動

「談書会」は、明治40年6月、巖谷小波・犬養木堂・阪正臣らの発起で創立され、日下部鳴鶴・前田黙鳳・中村不折ら11名が幹事となり、毎月集まって書の研究をした。会員は400名にもなったという。

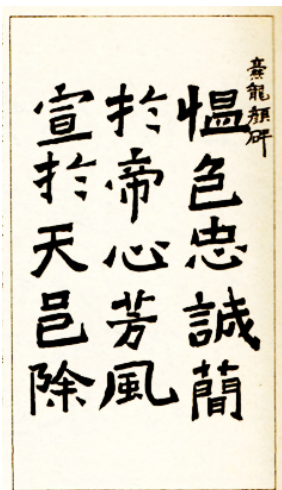
明治41年には、中村不折と前田黙鳳が中心になって、「健筆会」を興した。しかし、これは5〜6年で解散。明治41年7月頃、日下部鳴鶴・前田黙鳳・中林梧竹らと、「書談会」を結成した。

日下部鳴鶴と不折は、談書会などで、たびたび対立した。楊守敬直伝の正統派を自任する鳴鶴は、北魏の「鄭義下碑」、後漢の「張遷碑」などによって正統を主唱した。

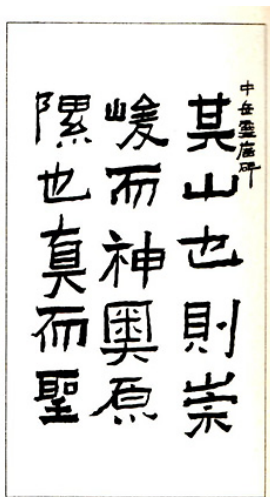
不折は、楊守敬が軽んじた北魏の「中岳靈廟碑」や、東晋の「爨宝子碑」などを推奨し、鳴鶴と対立した。

「・・・此等の諸碑（三国の魏から南朝・北魏までの）は、北魏あたりのものよりは非常に雅であって、何となしに習って見る気になったのが始めである。・・・北魏あたりのものと異なつて、其れが実に俗氣を離れた何とも云へぬ味がある。・・・僕は爨龍顔の碑と中岳靈廟の碑とを基礎として、その他は参考として居るが、点と云へば三角の点、画は四角と云つたやうに、どれを学んでも同じ結果とも思われて、・・・晋宋夫れぞれに相応した風骨を味わう事が出来ると思ふ。・・・併し夫れを学んで真に近づけば近づく程、世間からは種々な非難や攻撃を受ける事と信じて居る。・・・目慣れぬと云ふ感情から来る批評は決して正鵠を得るものでない事は云ふ迄もない」（不折・明治42年7月

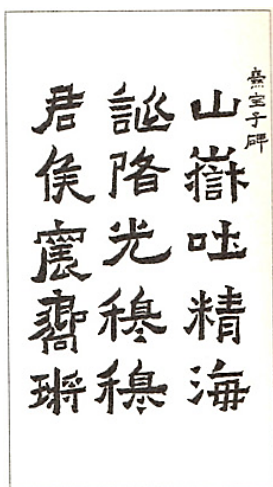
『日本及び日本人』（爨龍顔と張遷碑）



不折臨書「爨龍顔碑」



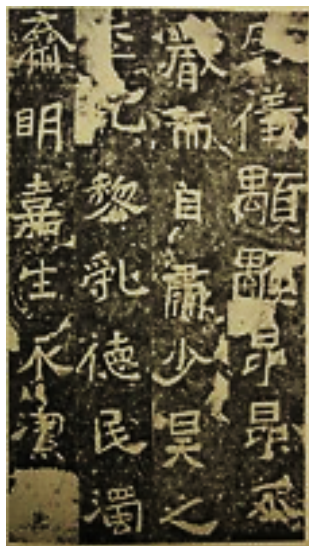
不折臨書「中岳靈廟碑」



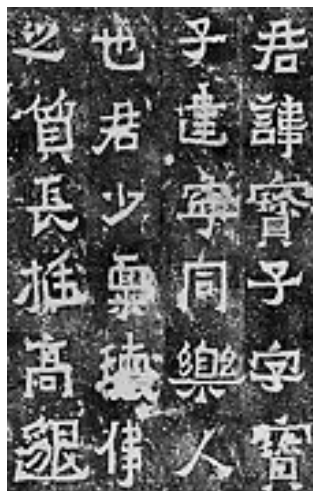
不折臨書「爨宝子碑」



「爨龍顔碑」劉宋・458年建立
地元（雲南省）豪族の墓碑
康有為は「隸楷の極則」と讚美。



「中岳崇高靈廟碑」北魏・456



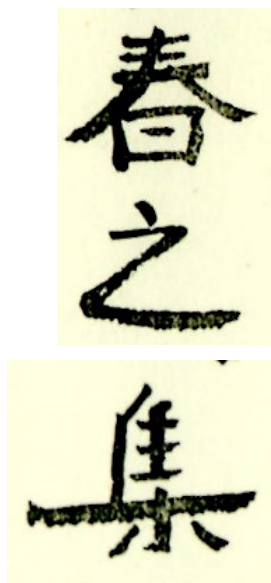
「爨宝子碑」東晋・405年建立
地元（雲南省）豪族の墓碑。



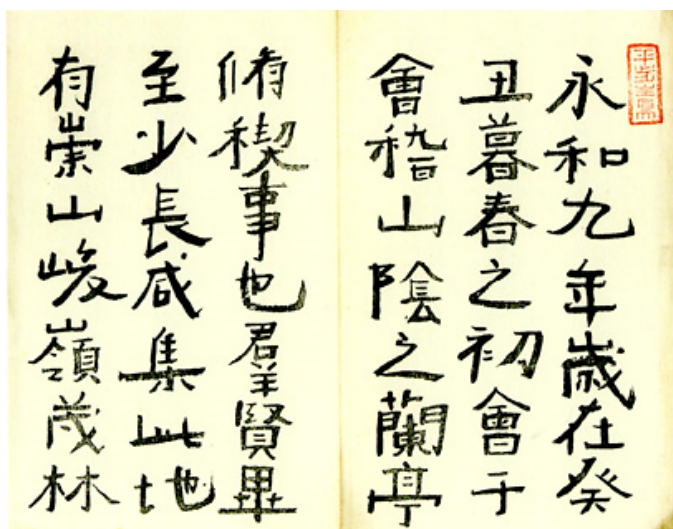
「谷朗碑」吳・272年建立
地元の官吏の墓碑



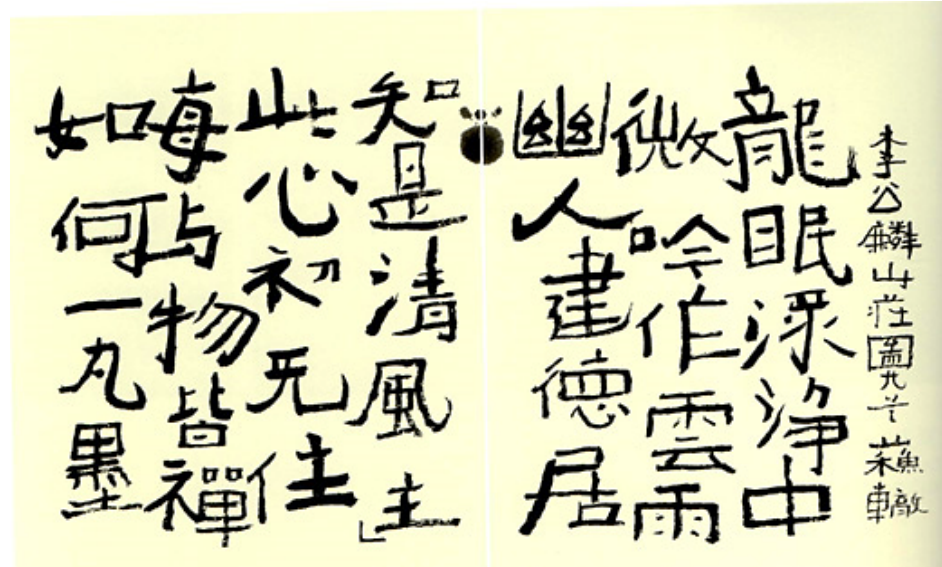
明治末頃の「書展風景」これは明治45年の談書会か？
明治末、会場を借りて、書画家たちが家蔵の書画や文房具などを展覧する雅会や書画会が盛んに開かれた。1909年（明治42）の健筆会の第1回展などが有名。



部分拡大



不折・創作「蘭亭序」冒頭部分 大正元年（1912）9月1日揮毫
折本 各頁26.6×16.1cm 平安堂発行 台東区立書道博物館蔵
『爨宝子碑』『谷朗碑』等の影響の書。



不折「龍眠帖」冒頭部分 明治41年（1908）折本、各29.0×23.6cm 台東区立書道博物館蔵
『龍眠帖』は人気で、よく売れた。大正2年11月には5版を重ねたという。

＋明治41年（1908）不折は多忙のためか、神経衰弱になり、群馬県碓氷温泉で療養していた。彼は、うつ病のリハビリを兼ねて、8月28日、北宋の蘇轍（そくご）の詩「題李公麟山莊図」20首（五言絶句）を書いた。

「……所が何だか普通世間の字と違った様なものが出来たので人に示す訳ではないが面白いと思って河東碧梧桐君に見せた、すると之は面白い、今まで書いてゐるものより面白いと油をかけられ、外にも之は面白いから印刷しろといふので……、始めて政教社の日本及日本人に発表して龍眠帖と名付けました、そして実費で頒ける事にしました。」（不折先生に訊く）

不折は、これを発表するつもりはなかったが、この習作を見て感動した河東碧梧桐の勧めで、同年10月10日、『龍眠帖』と名づけ刊行された。発行人は河東碧梧桐。「中岳靈廟碑」「爨宝子碑」をモデルに書かれた書。A4判変形、本文22頁、各頁に1行5字、各4行、計20字書かれている。木版印刷、折本。

発表されると、賛否両論、日本の書家や知識人の間で一大事件となった。

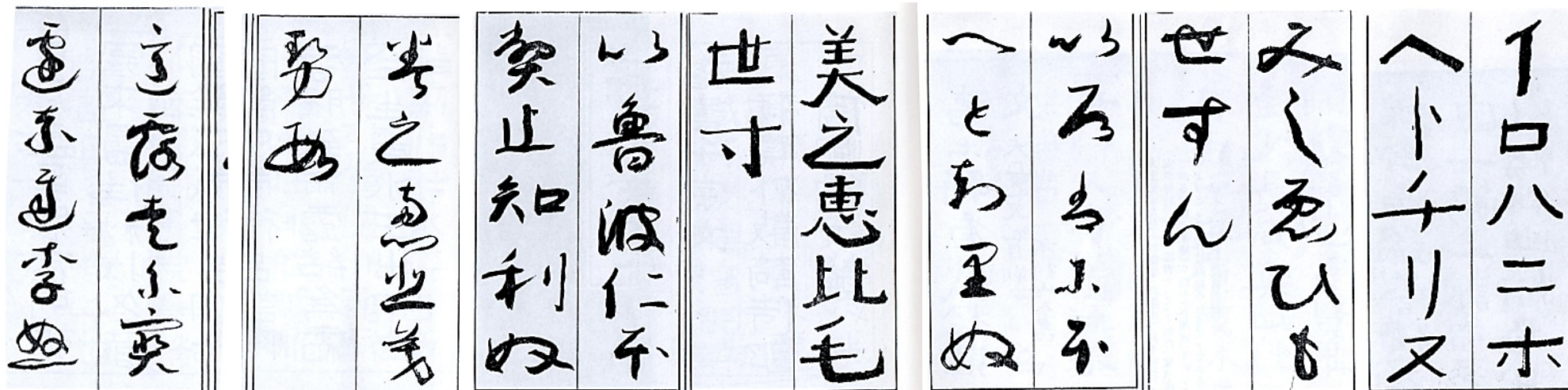
漱石、内藤湖南、日下部鳴鶴、高村光太郎、幸田露伴らは厳しく批判した。碧梧桐の仲間の俳人達は歓迎し、芥川龍之介や室生犀星らは、不折の書風の影響を受け、森鷗外、伊藤左千夫、中村彝、荻原礫山らの墓標は不折の揮毫である。

「僕の字は、著しく他の人のものと異なつて、甚だ奇怪に見ゆるさうであるが、僕は殊更に奇怪なものを書かうと思つて書くのでもなければ、又た特別に人と異なつたものを書かうと企てて居る訳でもない、……僕の書く字は決して不折の独創でもなければ、又た古人の書に就いて最も奇怪なものを択んだ訳でもない」（不折、「爨龍顔と張遷碑」「日本及日本人」明治42年7月）

「京都の内藤湖南君は碑の研究に関して、我々に反対し、……邪道と言つて居るが……我々は決して書を以て誇りとするものではない。……我々の研究は書其のものゝ本体を味ふにある。内藤君は我々が……阮元の北碑南帖論に依つて論拠を立て居るやうに思ふて居るやうだが、夫れは大なる誤解で、我々は決して阮元の説を根本として居るのではない。帰する処は西洋のサイエンスを基礎とするもので、阮元の説と雖も善いところは採るも、悪い点までは採ることはないと言ふのが我々の考へである」（不折、「書談」碑と帖）

「太陽」明治44年9月）

「……近頃都会でも地方でも、度々奇怪な文字を見受け、そしてそれが段々次第々々に行われる傾向をなしてゐるのを感じさせられる。勿論それは書家といふほどの人が為せることでもないが……張瑞図や祝枝山、勘亭、俗仮名のやうな味ならまだしも、歐羅巴、亜米利加の味を漢字に付けて人に食はせやうといふのである。かゝる愚な事は齒牙にかくるに足らぬ……」（幸田露伴、「書談」昭和9年）



不折筆「七体いろは帖」部分 大正元年11月揮毫 右より、片仮名、平仮名、変体仮名、楷書、行書、草書、章草の七体で書かれた「いろは帖」 仮名は六朝碑風に書かれている。



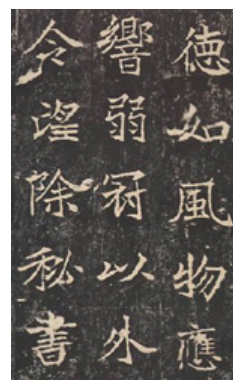
「爨龍顔碑」部分
宋・458年



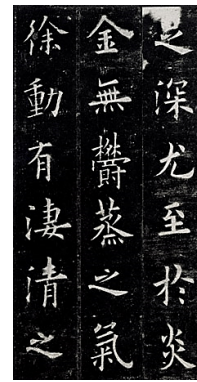
「晉寶子碑」部分
東晋・405年



「鄭羲下碑」部分 北魏・511年



「高貞碑」部分 北魏・523年



「九成宮醴泉銘」部分
初唐・632年

(漱石の不折批判)

「……本日本建筆会と申すものを見候、……不折の悪口を一寸申候。あの男の画も書も駸々乎として邪道に進歩致し候、あゝ恰好ばかり奇抜がってどうするかと思ひ候。不折先生の善所と申せば昔の一高の生徒が無暗に武貼つて是が世の中で一番いゝのだと力み返つたる、あの若殿原の善所に候。……」(明治45年5月26日、戸川秋骨宛、漱石の書簡より)

「……健筆会と申すもの一覽……不折例によつて不良少年の悪達者を發揮致し居候……」(明治45年5月27日、寺田寅彦宛、漱石の書簡より)

楷書の構成法三種

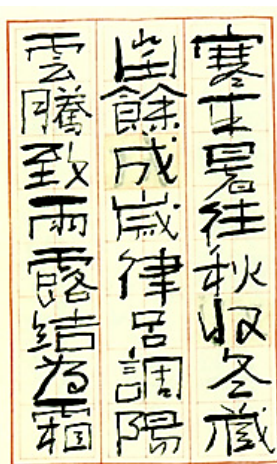
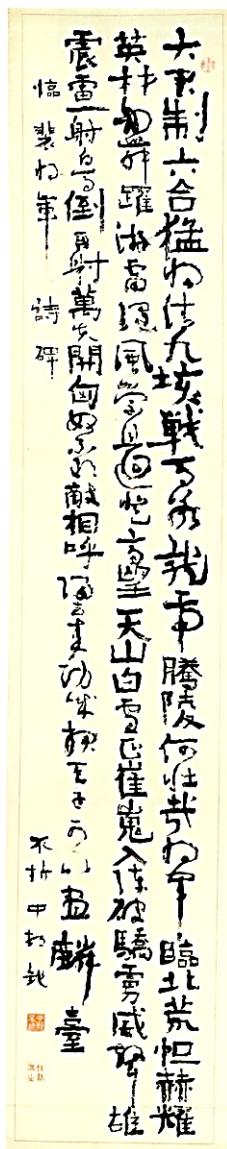
楷書は、数百年かけて、隸書から変化してきたものと思われる。

初唐の楷書が、「楷書の極則」と言われるように、楷書の典型、完成形、と一般に考えられているが、しかし、それは絶対的なものではない。

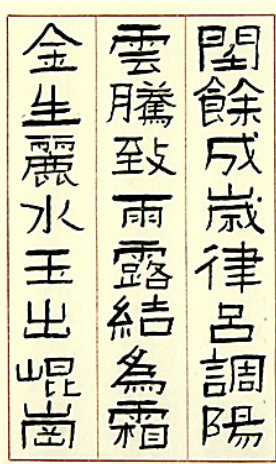
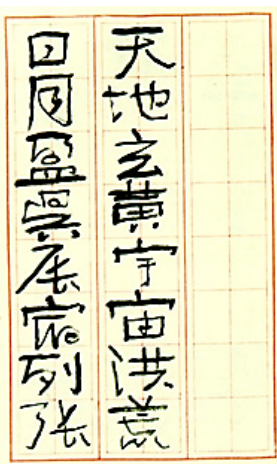
北魏の楷書は、初唐の楷書に至る過渡的なもののようにも見えるが、独自の完成された構成法により成立している。日下部鳴鶴らの碑学派は、北魏の楷書や隸書、篆書を書の美の基準と考えた。

中村不折らは、北魏の初期や六朝の呉や東晋、宋代の、隸書から楷書への移行途上の姿と思われる未完成の書体に、新しい美の基準を発見した。

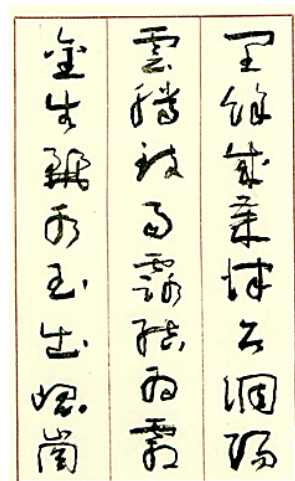
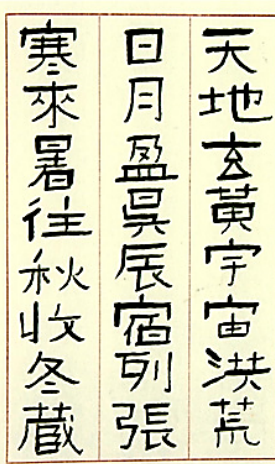
明治時代の日本には、隋唐派と北魏派と六朝派の三派が対立しながら盛衰をくりかえしていた。北魏派の鳴鶴らは北魏の楷書を「六朝書」と呼んでいる。



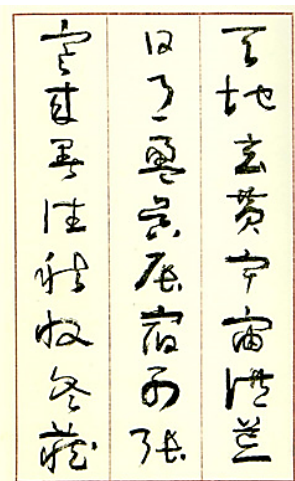
不折「行書千字文」稿より 大正7年夏揮毫 各頁 25.3×17.8 cm



不折「楷書千字文」より 大正7年夏揮毫 各頁 25.5×17.0 cm



不折「草書千字文」より 大正7年夏揮毫 各頁 26.5×16.9



それは、不折が、線による人体デッサンの鍛錬と並行して、毎夜、孤独のうちに、書を独習したことによるものと思われる。

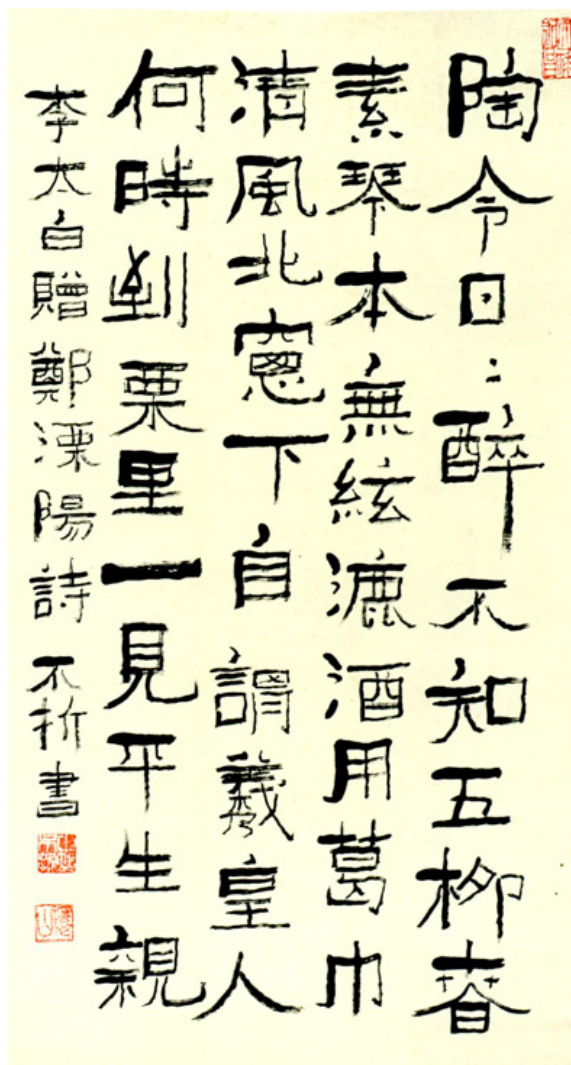
不折は、パリ留学中（1901年～1905年）、
『書がはたして芸術として存立しうるか』という問題意識を持ち
続け、その結果、書がまぎれもなく西洋の美術に比肩しうる『造
型芸術』であるとの結論に達した。
明治15年（1882）「書ハ美術ナラズ」といった師小山正太
郎とは正反対の結論である。

在パリの日本人留学生のための親睦会である「パンテオン会」
の会誌である『パンテオン会雑誌』に不折が載せた「書のはなし」
の中で、「一本の字画を『線として見る』から『形として見る
こと』への視点の変換がみられる。」（南出みゆき氏）

「美術そのもの、性質から云へば書も画も全く同一である」と云ふのが私の持論である。その形とか、その品位とかは、結局洋画も書道も一つである。…『書と画』、『塔影』昭和11年12月



不折「前後赤壁賦」大正7年（1918）秋
双幅のうちの「前赤壁賦」
余白に画賛のように「前赤壁賦」が楷書で書かれている。



不折「れいしより はくごこんりっし んぞうていりつよう 隸書李白五言律詩『戲贈鄭深陽』」昭和10年 紙本 軸装 179.5×96.0 cm 台東区立書道博物館蔵
六朝書がベースになっている、楷書と隸書が交差した、不折独自の書風。不折書の集大成と言われる作品。明るく楽しい作風。不折70歳頃の作品。

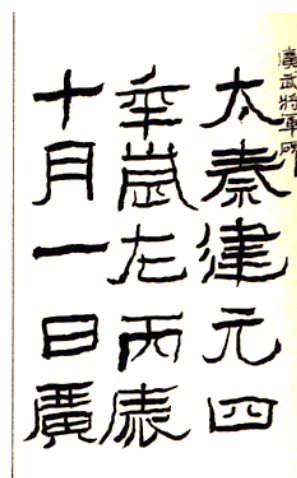


不折「ざゆうめい 坐右銘」昭和10年(1935) 折本、印刷 各頁24.5×8.5 cm
隸書作品 線に表情をもたせている。 台東区立書道博物館蔵

「画家として、書家として、中村不折が求め続けたのは、『書画同源』という東アジア伝統の芸術観を近代日本においていかに復興させるかという困難な命題であった。」(長野県立歴史館学芸員はやし・まこと氏)

「不折の『六朝書』の筆法
不折の書の線は、常識的な筆の持ち方(懸腕直筆など)や運筆法では表現できない。それは、筆の「**回転**」や「**逆筆**」や「**側筆**」や「**偃筆**」や「**倒筆**」や「**捻**」たり、**突き**込んだりするといった、不折の、ためまぬ、意識的な、運筆法の工夫と研究から生まれたものである。

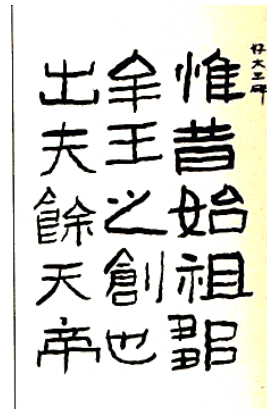
碧梧桐の解説によると、「**回転**」は、初唐の三筆の書や六朝の書に見える。「**側筆**」とは、筆を右に**ね**かすこと、「**偃筆**」とは、筆者の身の方に筆を倒すこと、「**逆筆**」とは、筆を左側に**ね**かすこと、「**倒筆**」とは、筆を前方に倒すこと、らしい。



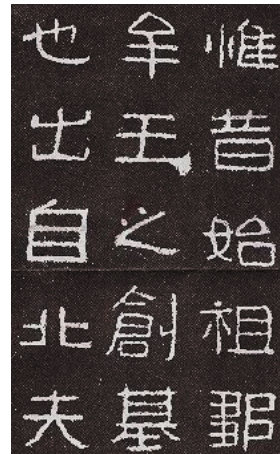
不折臨「こうふしやうぐんひ 廣武將軍碑」



「こうふしやうぐんひ ぜんしん 廣武將軍碑」前秦・368年建立
不折は神品と激称した。



不折臨「好太王碑」

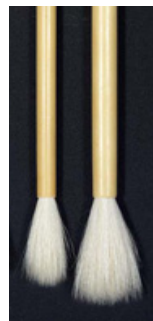


「こうたいおうひ 好太王碑」414年
高句麗の第19代の王である好太王(広開土王)の業績を称えた石碑。
中国吉林省集安市にある。

龍眠会

明治41年10月、『龍眠帖』が刊行されてから、河東碧梧桐の宣伝等により、新傾向俳人の間に、「龍眠帖ブーム」「六朝書ブーム」が巻き起こった。同年12月、岡田平安堂によって「龍眠筆」も作られた。

明治45年6月1日、弁護士で不折と親交のあった井関源八郎の発案で、不折先生の六朝書の会を起そうということになり、6月15日「龍眠会」が誕生。機関紙が出来るまでは、龍眠会の記事は、井関源八郎発行の『法律日日』に載せることになった。



「龍眠筆」

龍眠会会則（明治45年7月1日発行の『法律日日』に載ったもの）

- 一、会ハ書道研究ノ為ニ非ズシテ下手ナ字ヲ書キ自ヲ賞賛スルヲ目的トス
- 一、書法七十二則等ハ禁物中ノ禁物ナリトス
- 一、主事一名ヲ置ク（投票ニヨル）
- 一、会員ハ主事ノ書論ヲ聞クホドノ義務ナキモノトス
- 罰則
- 一、字ヲ上手ニ書カンナドト心懸クル者ハ退会ヲ命ズ

龍眠会は中村不折を主事とし、会の主な運営は碧梧桐を中心に行われた。

大正2年（1913）、機関紙『龍眠』が創刊され、その編集は碧梧桐の指示により行われ、その内容は碧梧桐色の強いものになっていった。不折の書論は「漢魏書道論」などが42回連載された。その他、「法帖談」「碑と法帖」「淳化法帖」などが発表された。また、碧梧桐の「六朝書と我輩」「手習いの意義」「書の心理学的研究」「同人閑是非」なども発表された。龍眠会は新傾向俳句の人たちを中心に、会員数が200名にもなったが、大正10年11月、『龍眠』は59号で廃刊になり、龍眠会は解散した。

『六朝書道論』（不折の革新的な序文と付録に「六名家書談」がある。）



『六朝書道論』

大正3年（1914）2月、康有為の『広芸舟双楫』を井土靈山と共訳で二松堂書店から出版したもの。『広芸舟双楫』は、包世臣の『芸舟双楫』を発展させたものである。『芸舟双楫』は、阮元の説を継ぐ北碑派の理論書で、逆入平出の用筆法を説き、鄧石如の篆・隸・楷書を天下第一と称し、鄭道昭の名を世に知らしめた書である。阮元は、「北碑南帖論」「南北書派論」を著し、北碑を書の正統とし、碑学を主張した。

『広芸舟双楫』は、中国書道史概論で、書の源流などを論じ、碑学派の理念を述べたもの。1893年（明治26、光緒19）に32歳の康有為によって著された。内容は、王羲之の書の真を学ぶには、法帖よりも王羲之と同時代の碑文が最も真跡に近いとして、これを学ぶことを勧めた。揚州八怪の金農と鄭板橋を碑学派の先駆者とし、尹秉綬と鄧石如をその開祖と主張し、鄧石如の篆書と楷書を最も高く評価した。康有為は清末民初の政治家・思想家・書家で、1898年（明治31）の戊戌変法の指導者。

『六朝書道論』——不折の序文の抜粋——と——付録の六名家書談——

「古来本朝の書を論ずる者、空海と道風とを以て書聖と為し、其の時代をば書の黄金時代として回顧するを常とせり、然れども余を以て見れば書道の盛んなる未だ曾て今日の如きはあらず、空海道風の書、……唯唐書の盲従者たるに過ぎずして、唐代の書を溯源的に解釈して之れを崇拜したるものにあらざるが如し。」

「空海・道風の崇拜時代には唐碑以外は殆ど見る所なく又知る所なく、六朝書の如きは数々翻刻せる黄庭経・樂毅論等を目観したるに過ぎざるもの如し。今や然らず、漢魏六朝碑を合して四百種を観得るのみならず、近來敦煌に於て発掘せられたる幾多の墨宝は実に漢碑六朝の肉筆其物にあらずや、之れを唐碑の重刻屢翻のものに比し来らば霄壤も畛ならざるの感あらん。美術家の最後の叫びは『自然に帰れ』の一語に在り、余は思ふ、書道

に於て漢魏六朝碑に向つて所謂る自然の尋ねべきもの多々なるを。・・・康氏の此書たる六朝書を論ずるに於て未だ完璧と謂ふ能はざるも、今日まで世に現はれたる書論中に於ては最も進歩せる書論と謂ふを妨げず、而して康氏の所論と余輩の所見とは一致せざるもの亦尠からず、議論の相容れざる所の多き、是れ最も興味の深き所たらざるばあらず、・・・」

「・・・巻末に掲ぐる六名家書談（中林梧竹・中根半嶺・日下部鳴鶴・前田黙鳳・内藤湖南・犬養木堂の書談）は、二松堂主人の希望に依り、靈山の編纂する所、平凡の書談中亦他山の石なきに非らず。」

六名家の書談は、読むほどのことはない。本の箔づけのために載せたのだろう。

書道博物館

昭和7年（1932）書道博物館建設に着手し、翌年完成、昭和11年（1936）11月3日、財団法人として正式に開館した。

収蔵点数は、約一万六千点。収蔵品は、書道史上重要な、

古代から明清に至る中国文物が主だが、日本の資料もある。これらは、

中村不折がただ一人で集めたものが基本になっている。彼は、タバコも酒も飲まず、

身なりも構わず、質素に暮らし、書画を売って、文物収集のための資金を貯め、

博物館を造った。これらの収集は、不折が、子規に誘われ、明治28年（1895）日清戦争の従軍記者として中

国へ渡り、漢字の拓本類を手に入れた時から始まる。不折は、その後40年余りにわたって、漢字に関する文物を

収集した。収蔵品は、すべて「文字研究」「漢字研究」という観点から収集されたものである。

不折が亡くなった後、長男の丙午郎氏が第2代館長になり、その生涯を博物館を守るために送った。

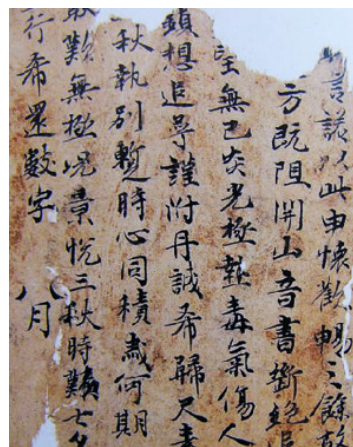
平成7年（1995）台東区に寄贈されるまでの約60年間は、

中村家によつて維持、保存されてきたが、平成12年（2000）、

台東区立書道博物館（台東区根岸2丁目10番4号・子規庵の向かいにある。

もと中村不折旧宅）として再開館された。現在、第3代館長は、

不折の孫の中村初子氏である。不折コレクションの名品の一部を見てみよう。



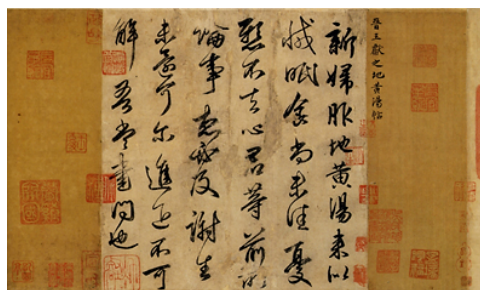
伝トルファン出土写本（月令の一部）
不折コレクション中で、世界的に最も注目されているものが、敦煌・トルファン出土の経巻文書類である。



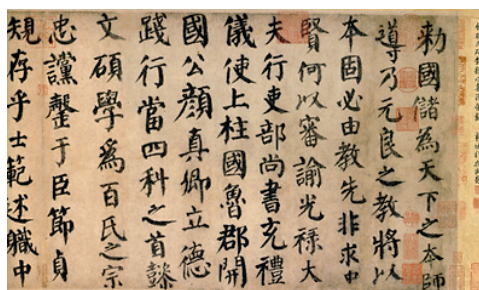
「永寿二年三月瓶」後漢（156）
陶製の甕に黒漆で隸書が書かれている。不折は自らの室号を「永寿壺壺斎」としている。



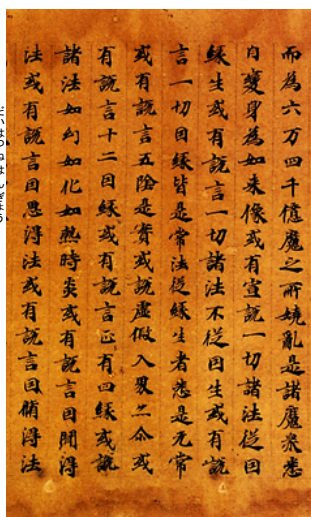
「泰山刻石・165字本」



王献之筆「地黄湯帖」部分 東晋



顔真卿筆「自書告身帖」部分 唐（780年）
楷書の肉筆として世界唯一のもの。



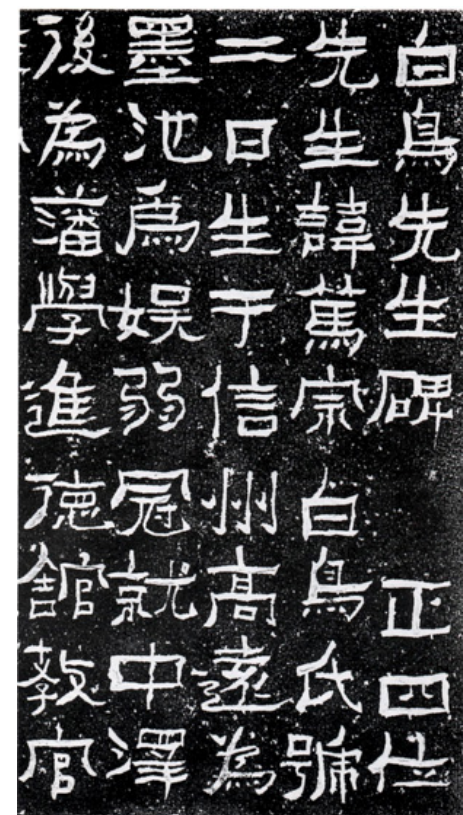
敦煌出土「大般涅槃經卷第四十」部分 北魏（505年）

不折コレクションには総数で約2000件、断片を個別に数えれば800点を超える経巻文書コレクションがある。昭和10年（1935）、ポール・ペリオが来訪した。



台東区立書道博物館と子規庵（左側）

大正10年（1921）頃以降、不折は書画の表現者ではなくなっていく。そのかわり、書道史解説者、コレクター、書史学者としての活動が主になってくる。大家にはなったが、「芸術は短く、人生は長い」ということか。不折は、昭和18年（1943）6月6日、いつものように午前中はモデルを使って絵を描き、午後は書をかき、夕刻、夫人に護られ散歩の途中、午後6時20分頃、脳溢血で急死した。享年78歳。



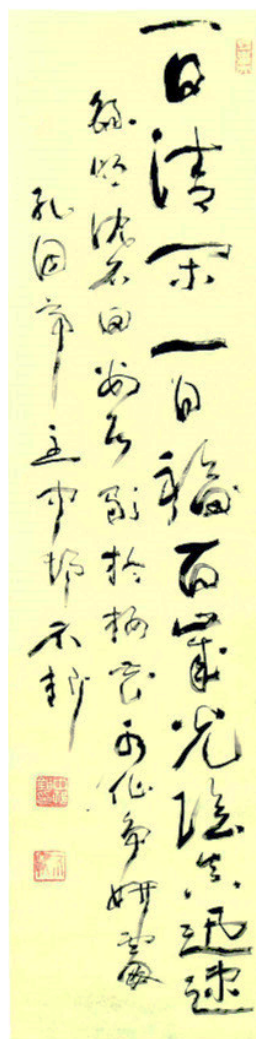
不折「白鳥先生碑」部分拓本 昭和2年（1927）

不折の少年時代の書の師であった白鳥拙庵の顕彰碑。不折の撰文・揮毫。碑は高遠町の建福寺に現存。『広武將軍碑』風に、点画が、ふるえ、うねっている。



不折「滝乃川学園追悼記念碑」紙本墨拓 200×95.7 cm 大正末年～昭和初年頃
歌は、石井亮一
天津あけぼのに よびさまされて
あふぐもうれしな とはのみひかり 中村不折敬書

彼は、中国や西洋を超えて、日本的で個性的な作品を創造した。彼の絵画作品は陳腐にみえるが、流行を追わず、人間の真実の探求に美的価値をみていたようである。

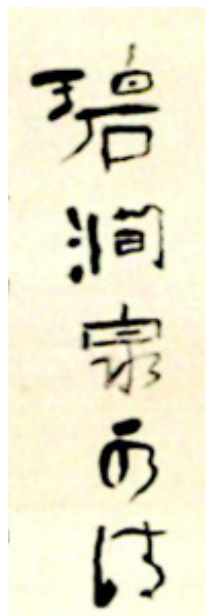


不折「草書七言二句」絹本 131.0×32.6 cm
不折の筆使いの妙筆を開き、先端や腹の部分を用いることで、かすれの表情に変化を持たせている。

一日清閑一日福 百歳光陰真迅速
録明沈石田安居歌 於梅花水作争妍処 孔固亭主 中村不折



不折「豊干・寒山拾得図」 126.7×34.6 cm 絹本墨画淡彩
対幅の片方



画賛部分

碧澗泉水清 寒山月華白 默知神自明 観空境逾寂 不折筆



呉昌碩刻「豪猪先生」 3.3角 豪猪は不折の別号



呉昌碩刻「邨鉞」 3.3角 邨鉞は不折の本名の略

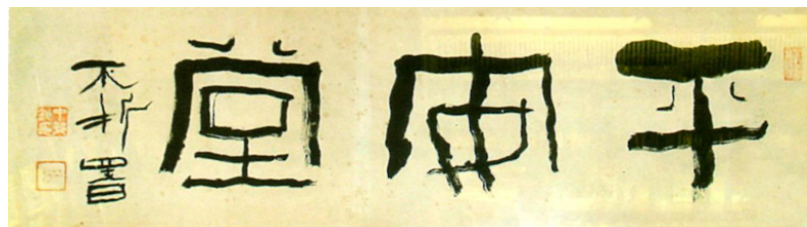


不折筆「高遠図書館」伊那市立高遠図書館にある看板。



不折題字「森鷗外全集」
題字揮毫は、大正 11 年 (1922) 10 月、
与謝野鉄幹より依頼された。

鷗外の小説『渋江抽斎』(大正 5 年・1916 年)の中で、「・・・抽斎の述志の詩は、今わたくしが中村不折さんに書いてもらって、居間に懸けている。わたくしはこの頃抽斎を敬慕する余りに、この幅を作らせたのである。・・・」と、鷗外が不折の書を変え重んじていたことが記されている。



不折筆「平安堂」扁額 平安堂の店内にある。

平安堂は、九段下南、靖国神社のそばにある、明治 26 年創業の筆屋。「龍眠筆」を作った。龍眠筆は、不折や碧梧桐だけでなく正岡子規、森鷗外、夏目漱石、高浜虚子らが愛用したという。



不折筆「東京新宿中村屋」看板 中村屋はパンやお菓子の店、創業は明治 34 年 (1901)

明治末から大正にかけて、新宿中村屋の創業者の相馬愛蔵と、その夫人黒光の周りに、後年「中村屋サロン」と呼ばれる芸術家たちの交流の場が生れた。これは、明治 41 年 (1908) 萩原碌山が帰国して、中村屋の近くにアトリエを構えたことに始まる。不折もメンバーの一人になった。その他、中村彝、会津八一、鶴田吾郎、中原悌二郎、戸張孤雁、松井須磨子、木下尚江、秋田雨雀や、インドの革命家やロシアの詩人らがいた。

看板・題額・書籍の題字など



不折筆「故碌山萩原守衛之墓」
ろくざんおぎわらもりえ

彫刻家碌山にとって、同郷の先輩不折は、「不同舎」「太平洋画会研究所」の大先輩でもった。碌山との縁で、不折は新宿の「中村屋」とも馴染みになった。パリ留学中、アカデミー・ジュリアンでも二人は出会い、不折の刻苦勉強する姿に、碌山は大変勇気づけられたようである。後年高村光太郎は、碌山から精神的な大きな影響を受けていると思われる。

碌山は、明治 43 年 (1910) 4 月 22 日、急逝した。享年 30 歳。墓は信州の安曇野市穂高町にある。



不折筆「森林太郎墓」

森鷗外は墓碑に肩書を書くことを禁じ、書を不折に依頼するよう遺言した。不折と鷗外は親交が深かった。



不折筆「伊藤左千夫之墓」
大正 2 年 (1913) 7 月 30 日
脳溢血で逝去。享年 48 歳。

墓石題字